

---

# お迎えは死の間際に

さや

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

お迎えは死の間際に

### 【Zコード】

Z5846Z

### 【作者名】

さや

### 【あらすじ】

約束の時間に現れない恋人を、待つて待つて待ち続けたあげく凍死しかけた女性の身に起こった不思議な出来事の話。

時は冬。

夕日もすっかり地平線の彼方へと沈み、建ち並ぶビルの隙間をヒュウと通り抜ける風と共に静かに雪が降り積もっていく。

そんな身を切るような寒さにも負けず、幾色にも輝くイルミネーションの下を幸せそうに笑う人々が行き交っていた。

「こんばんは、お姉さん。1人？」

駅の傍らに鎮座している芸術的なモニュメント。そのすぐ横にあるベンチにドカリと腰を下ろした茶髪の男は、隣りに座る20代半ばと思わしき女性へ無遠慮に話しかけた。

女性は男の方を見る事無く、毅然とした態度で言つ。

「いいえ、人を待っていますから。」

「またまたそんな事言つちやつて。もつ何時間もここにいるじやん。このままじや凍死しちゃうよ。俺と一緒にどこかで温かいお茶でも飲まない？」

男の提案に、女性は薄く眉間に皺を寄せ苛立ちを露わにした。それから、睨むように視線をやつてスッパリと言つ放つ。

「お断りします。私の事は放つておいて下さー。」

女性よりあからさまな拒否を受けた男は、どうしてか悩ましげに眉尻を下げて小さく息を吐いた。

「それが、そうもいかないんだよねえ。」「なん……つー?」

瞬間、世界が灰色に染まった。  
女性は驚愕に目を見開き、辺りを見回して額からひとりすじの汗を垂らす。

「なつ……」「これつ……。」「

常識を大幅に超える範疇の出来事を前にして、上手く舌が回らない。

2人を除く誰もかれも……いや、何もかもがその一切の動きを止めていた。

先程までの雑多な喧騒が嘘のよつて、今は静寂が町を包んでいる。

「俺は、Jの界隈担当の死神310341号。  
さつきも言つたけど……君、もうすぐ凍死するよ。」「  
死……神……?」

男の言葉がにわかには信じられず、女性は怪訝な表情を見せた。  
だが、周囲の異常な現象を思い出し、今度は信じたくない思いで眉間に皺を寄せる。

「……私、まだ生きているんですね?」

「ああ、まだ死んでないよ。まだね。」

とりあえず今、現実世界の君は意識を失っている状態だ。  
で、このまま後1時間も経たない内に死ぬ予定になつてる。」

男の口から淡々と告げられる言葉に、女性は動搖を隠せない。  
若い身空で唐突に超常の存在から死を予言され、それを怖れない

ところはあまりいないだろ？

彼女は泣きそうに顔を歪め、ブルブルと全身を震わせながら男に向かい声を荒げた。

「わ…たしつ…まだ死にたくないつ。なんとかつ…、何とかならないんですか！？」

詰め寄る女性に何の感情も浮かばぬ虚無の視線を返して、男は勿体ぶるよつにゆつくりと足を組みながら片腕をベンチの背もたれに乗せた。

そして、ほんの数秒だけ瞳を閉じ呆れた様にため息を吐いて、半目に彼女を映しこう告げる。

「でも、君はさつき俺の誘いを断つたじやないか。

アレが一番、何の問題も無く死を回避する方法だったのに。ま、もう遅いわけだけど。」

「そんなん…！そんなの！」

理不尽だ、と続けよつとして言葉に詰まる。

いつの間にか男がその役職に相応しい漆黒のローブと巨大な鎌を身に着けており、いかにも人ならざる者といった白い瘴気を纏っていたのだ。その姿を目の当たりにして、女性は急速に理解する。彼が文字通りの死神だと言うのなら、そもそも最初にチャンスを「えられた事自体すでに奇跡にも等しかつたのだ、と。

けれど、彼女はそれを知つてなお諦めずにはいられなかつた。

「じゃあ、せめて最後に一目で良いから恋人に会……いいえ、見るだけでいい。

今、彼がどこで何をしているのか。一目だけでも見ることは叶わないでしきうか。お願ひします。」

彼女がそう言つて勢いよく頭を下げるとい、男はきょんと首を傾げつつ問いかけてくる。

「その恋人つて、君の死ぬ原因になつた待ち合わせの相手？」

「…………はい。」

女性はしづかに沈黙の後、痛みを堪える様な表情で手を強く握り込み、小さく頷いて肯定する。

そのまま数秒間俯いていた彼女は、今度はキッと力強い眼差しを男に向け口を開いた。

「私は知りたいんです。彼がなぜ約束の時間に現れなかつたのか。呆れるほど律儀な性格の彼が、どうして今回に限つて連絡ひとつくれなかつたのか。」

「ふうん……。

まあ、見るだけといつのなら、俺はその願いを叶えてやるにやぶさかではないよ。」

「本当ですか！？」

「うん。だから、とりあえず座つて。」

驚きと喜びに思わずガタンとベンチから立ち上がつた女性を再び座らせ、男はどこからか取り出した直径4センチほどの赤いコンパスを彼女の手中に落とした。

同時にわざとらしい日本語英語でひつひつと告げる。

「ふれぜんと・ふおー・ゆー。」

「…………これは？」

「持ち主に対し、一定以上の恋情を抱く者が居る方角を指し示す特殊なコンパス。」

君の言う恋人とやらが本当に君の事を愛しているのなら、そのコンパスは間違いなく君を彼の元へと導いてくれるだろう。

だけど、彼が君を本当に愛していなかつたのなら、針の指示示す方角は出鱈目だ。君は幽鬼となつて永遠に現世と常世の狭間を彷徨い続ける事になる。」

話の内容を理解した彼女は、『ぐりと喉を鳴らし手の平の中のコンパスを恐ろしげに見つめた。

沈黙を続ける女性へと、少々愉快そうに口の端を歪めながら男は問う。

「さて……。

それでも、君はそのコンパスを使うかい？」

彼女はどうしようもなく迷っていた。  
一目だけでもという想いに嘘は無いが、彼女には恋人に愛されている自信が無かつた。

大学時代に知り合つた彼とは、もう5年の付き合いになる。

彼女の愛はけして醒めてはいないが、当の相手とは半年ほど前から疎遠になつていた。

距離を取り始めたのは、もちろん彼の方からだ。

それまでは毎週末彼の家に宿泊し順調に逢瀬を重ねていたのに、段々と仕事を理由に断られる様になつた。

彼女も始めはその言葉を素直に信じ、忙しい彼の身を案じていた。だが、今から2ヶ月前とのある日。彼女はついに見てしまう。いつものように仕事だからと自分と会う事を断つたはずの彼が、とてもそつとは思えぬ私服姿で見知らぬ女と笑顔で腕を組み町を歩いていいるところを……。

家族などという可能性は無い。彼女は彼のそれを完全に把握している。

思わず携帯を取り出しその場で電話を掛けるも、ディスプレイを確認した彼は顔を顰めてその着信を無視した。

その後、彼は女性と一緒にジュエリーショップへと消える。

それは、彼女にとつて卒倒したくなるほど大きなショックだった。

たまに会う際の彼の態度が以前と全く変わっていなかつたので、油断していたのだ。

……浮気なのだろうか。それとも、心変わりなのだろうか。

逢瀬の回数から推測すれば、後者のように思えた。

それでも追及する事も別れを切り出す事も出来なかつたのは、彼女が彼を愛し過ぎていたせいだろう。

だからこそ、彼女は今日という日टートの約束をしてくれた事をとても嬉しく思つていたのだ。

それこそ、待ち合わせの午前11時前から完全に日の暮れた現在の時刻まで、しんしんと雪降る中をただひたすら待ち続けるほどに

……。

「私、このコンパスを使います。」

ようやく意を決して発された言葉に、男は少しばかり目を大きく  
むかせる。

「へーえ、使うんだ。随分と自信が無さそうなの。」  
大人しくここで死んでおけば、来世とはいかなくとも遠いいつか  
にまた彼と一緒になるかもしないよ？本当にいいの？

生きる事も死ぬ事もできずに永遠という時の中をたつたひとり存  
在する辛さは、ちゃんと想像できる？」

「つゆ……ひょよつた事を言わないで下さー。」

無意識に拳を強く握り、中の赤いコンパスがギシリと悲鳴を上げ  
た。

それに気がついて、彼女は慌てて手を開く。

もう決めたのだ。死んでしまつのなら、なおさら彼の姿をこの田  
に焼き付けておきたいと。

負けて後悔する確率の方がとんでもなく高い、明らかに分の悪い  
賭けであることを承知の上で。

それでも、どうしても彼に会いたい一心で彼女は己の魂をベット  
した。

愛しているのだ。浮氣をされていたとしても、嘘を吐かれていた  
としても、裏切られていたとしても、なお一片も嫌いになれないく  
らい、どうしようもなく彼を愛してしまっているのだ。

すると、今までうんともすんとも言わなかつたコンパスの緑色の針が急にギュルギュルと激しく回転し出した。

「えつーなつー!?」

突然の事に驚き反射的に腕を引いたせいで、コンパスが彼女の手から離れてしまう。

ポスリと雪積もる地面に落ちたソレを、男がゆっくりと腰を屈め拾い上げた。

そして、後方に引かれていた彼女の腕を掴み強制的に前へと持つて來ると、開かせた手の平にコンパスを置きしっかりと握り直させる。

「もう後戻りは出来ないってことだよ。」

困惑する女性の両腕を持ちベンチから立たせると、男は彼女の背をポンと叩いて言った。

「さあ、行くんだ。」こつこつはすでに君が進むべき方角を示している。サービスで結果が決まるまでは身体の時を止めておいてあげるから、じつくじ探すといこう。」

その後、男は霞のように空気に溶けて消えた。

しばらく呆然としていたのち、ようやくコンパスに目を落とした女性は灰色に染まつた世界の中を一人歩き出す。

心の奥底で渦巻く不安を誤魔化すように、彼女は『私は彼に愛されている』と胸の内で幾度も幾度も反芻していた。

自分以外に動くモノの無い孤独な世界の中を、コンパスの針の傾くまま右へ左へと彷徨う女性。

5分と経たぬ内に焦燥感に煽られるまま駆け足になつてしまつ彼女だが、不思議とどれだけ走り続けても身体が疲労を訴える事は無かつた。

それから女性の体感で2時間ほども経つた頃、ある事に気が付きピタリと足を止める。

この針の示す先は、おそらく彼の自宅だ。  
普段の移動手段が車や電車であるために、彼女はここまでそれを知る事が出来ずにいたのだった。

だが、目指すべき場所を認識した途端に周囲の景色がぐにやりと歪んだ。

そして、次の瞬間にはただ灰色が広がるだけの何もない空間が世界を支配していた。

その事実に彼女は愕然とした思いでこゝりづく。

「…………ウ…………ソ。」

こゝは死神の言つていた現世と常世の狭間なのだろうか?  
今までの道のりはすべてまやかしであつたのだろうか?  
私はやはり彼に愛されてなどいなかつたのだろうか?

連鎖的に心の中に浮かんだ半ば確信に近い疑問を、無理やりここで吹き飛ばそうと彼女は頭を振った。

「ウソつ。ウソだ！私は信じない！私は彼に愛されてる！だって、コンパスはまだ動いてるー」の針の先にきっと彼がいる！」

狂氣じみた慟哭と共に再び走り出した女性は、しかし自分がどのような顔をしているのか知らなかつた。  
彼女の通り過ぎた空間が小さな霧に濡れて滲む。

長い長い苦しみの時が始まつた。

もう何日経つたのか分からないくらい延々とそうじして走っていると、次第に彼女も冷静さを取り戻していく。

徐々に駆けるスピードを落とし、数日ぶりに女性は足を動かすことを止めた。

俯いて足元を意味無く眺めながら、彼女は背に影を背負つ。

「……やっぱり、もう私は死んでしまつたの？」

呟いて、すり落ちる様にあるみると地面に座り込んだ。

これまで脳内で必死に否定していた考えを口に出した事で、身体から何かが抜け落ちて行くような感覚に襲われる。

そのまましばらくボーッとしていた女性は、今度は膝を抱えそこに顔を埋めて静かに口を開いた。

「……何……やつてゐんだろう、私。」

ふつと自嘲するような笑みを見せたかと思えば、すぐに眉を顰めて辛そうな表情に変わる。

彼女の脳裏に優しかった両親の姿が浮かんでいた。

「お父さん、お母さん……。

あなた達より先に逝く様な、親不孝な娘でごめん。ごめんなさい。私、なんでもっと親孝行しておかなかつたのかなあ。なんで……。なん……で……順……也。」

どうにもやるせない気持ちと共に愛しい彼の名を口に乗せた、まさにその時である。

灰色以外何ひとつ存在しないこの場所に、それこそ氣のせいいかと思つほど小さな声が響いた。

「…………か…………り…………。」

「つ順也!-?」

ガバリと勢いよく顔を上げて、信じられない思いで辺りを見回す。多少かすれ変質していようが、彼女がその声の主を間違えるはずもない。

「順也!-…順也、順也、順也あつ-」

いつそ幻覚でもいい、彼に会いたい。そんな切ないほどお願いを胸に彼女は再び灰色の地面を蹴った。

針に導かれるまま3時間ほど進んだ先で、女性はようやく……本当にようやく焦がれ続けた彼を見つけた。

「順也……！」

けれど、彼女はその姿をはっきりと血の腫に映した途端、ピタリと動きを止める。

そして、眼球を小刻みに揺らしながら呆然と口を広げた。

「ウ……ン……でしょっ……、順也っ……！」

そこには、まるで死体のようになじみの顔をして空中に浮遊する希薄な存在の恋人がいた。

緊張にふるえる手を少しずつ少しずつ彼に近づけて、彼女の指先が掠れるように頬に触れた瞬間、場面は一変する。

白い。

白い病室だ。すぐ傍の窓から外を眺めれば、ここが彼の自宅近く

の大学病院である事が分かる。

『ぐくりと唾を飲み込んで恐る恐る部屋の中央へ視線をやると……、思つた通りベッドの中に頬のこけた生氣の無い恋人がいた。もしかして、最初から針は彼の家では無く病院を指していたのだらうか……と、頭の隅で考える。

ベッドの周囲には医師と看護師の他に彼の家族が揃つているようだ。

母親は涙でボロボロになつた顔を拭いもせずに息子の名を連呼していた。

父親も兄も妹も酷く暗い表情でじっと彼の様子を眺めている。誰に教えられずとも、これがどのような場面であるのかすぐに想像がついた。

彼の家族の声が何かの層を隔てたようにボンヤリと彼女の耳に届く。

『どうして、こんな雪の日に外になんかつ……。』

『……兄ちゃんが倒れていた場所のすぐ傍にこの指輪が落ちていたよ。

多分、香織お姉ちゃんに渡しに行こうとしたんじゃないかな。』

『つバカかよ、順。お前の弱り切つた身体で外に出たりなんかした

ら、どうなるか分かつてただろう。

香織ちゃんの事、どうすんだよ。…チクショウ。』

『……ああ、香織さんといえば。

彼女に連絡を取りに行つた義姉さんがまだ帰つて来ないな。

出来ればまだ息子の息のある内に会わせてやれればいいんだが……。』

そこまで聞いて、再び女性は灰色の世界へと引き戻される。

戻つた場所に今にも消え入りそうな半透明の姿の恋人が申し訳な

恥ずかな顔をして立っていた。

上下左右も分からぬ空間に2人の男女が向かい合つて立つている。

しばらくお互い黙りこんでいたが、フウとひとつため息を吐いて彼女が抑揚の無い声で問つた。

「どうして黙つていたの……。」

『「めん。』

「つ謝つて欲しいんじゃない。」

『分かつてゐる。ごめん。』

治らない病氣だつて知つて、香織が離れて行くのが怖かつた。』

自らを情けなく思い、彼は彼女から視線を逸らして俯いた。

その言動にキッと眉を吊り上げた女性は、低く唸るよつと告げる。

「……何それつ。見ぐびらないでよ。」

それを聞いて、彼は顔を上げ小さく苦笑した。

『分かつてゐる。それでも、怖かったんだ。ごめん。』

「バカ。」

罵られたはずなのに、どうしてか彼はひとつ頷いてからはにかんでみせた。

『うん。バカなんだ、俺。香織の事に関してはいつもそう。だから病気だつづーのに、調子の良い時だけ一時的に帰宅をさせてもらつて香織の前でいつも通りの俺を演じたり、いよいよ弱つてどうしようもなくなつた時は結婚で縛れないかと指輪を買いやいかせてもらつたりしてや。』

無理言つてついて来てもらつた療法士さんには悪い事したよ。結局、指輪も渡せないままだし。』

「あつ。」

『ん?』

彼女が見た女性は彼の担当の療法士で、腕を組んでいたのは介助のためだつたのだ。

今さらながら自分の勘違いに気がついた彼女は恥ずかしさからほんの少し頬を染めて、それを悟られないよう慌てて首を横に振つた。

「う、ううんつ、何でも無い。」

それで、順也はもうすぐ死んじゃうんだよ…ね?』

『…身も蓋も無い聞き方するなあ。まあ、そうなんだけど。』

「あのね。実は、私も死にかけてるの。だから、どうせなら一緒に逝かない?』

「うやつて順也に会えたから、多分、私普通に死ねると思うの。」

彼女の提案に怪訝な表情へと変わつた彼が、皺の寄つた眉間に指を当てつつ言つ。『

『ちょっと待て、色々と意味が分からない。』

そもそも何で香織が死にかけてるんだよ。』

「つあー、えっと。ちょっと言ひにいくんだけど……その……。」

それから、女性がここに至るまでの経緯を簡単に説明すると、彼は深くため息を吐いたあと心底呆れたように一言ひつ告げた。

『バカ。』

「ごめん。」

しょんぼりと頃垂れる彼女に自嘲する様な笑みを見せて、彼が小さく首を横に振った。

『でも、俺もバカだ。……ちょっと嬉しいとか思つて、ごめん。』  
「あはは……、実は私も同じ事思つてた。私達つて案外似た者同士なのかもね。』

恥ずかしさからか言いつつ両手で顔を覆つていた彼が、ふと真剣な顔つきを女性に向けて来る。

それを受け、彼女も自然と背筋を伸ばし姿勢を正した。

『香織。』

「なに?」

しばし真顔で見つめ合つ2人。

互いの瞳の奥には同じだけの熱を湛えている。

彼は何かを断ち切るように一度だけ瞼を閉じると、再び熱い視線で彼女を捕え、そつと口を開いた。

『愛してる。……俺と一緒に死んでくれるか?』

「うん。どこまでだつて、ついて行くよ。……愛してる、順也。」

そうして、2人は微笑み、涙し、同時にきつく抱き合つた。

直後。

彼女の足元に落ちていた赤いコンパスが激しく光を発する。  
そのあまりの眩しさに反射的に目を瞑つた2人の身体を、清廉な  
光がすっぽりと包み込んだ。

さらに光は灰色の世界を浸食し、瞬く間に白へと染め上げていく。

全てが収まつた時、そこにはただ無が広がつていた。

沈む夕日に照らされてオレンジ色に染まる病室の中。

簡素なパイプ椅子に腰かけた女性の左手薬指に収まるリングが、  
キラリとそれを反射した。

室内にはシャリシャリと果物の皮を剥く音だけが響いている。  
ナイフを器用に動かしながら、女性は聖母のように穏やかな微笑  
みを浮かべていた。

切り終わったリンゴをベッドの上の彼に差し出しながら、他愛無  
い会話に興じるべく彼女は口を開く。

「明日も検査なんだって？」

「ああ。もう完全に治つてないみたいに、みんなが受けろって聞かないんだ。」

ポイとリングゴを口に投げ入れたあと、器用に咀嚼しつつ拗ねたようになにかを尖らせる彼。

そんな婚約者の姿に彼女はクスクスと忍び笑いを漏らす。

「仕方ないよ。

いきなり不治の病が完治しました、なあんて言つても普通は信じられないって。」

「まあまあ。それは分かってるんだけど、こいつベッドに拘束されちまうとなあ。」

言つて、彼は首を左右に傾げながら憂鬱そうに息を吐き出した。再びリンクゴに手をのばす彼を微笑ましそうに眺めながら、彼女はふととある疑問を口にする。

「……結局、あの男つて何だったのかな。

死ぬはずだった人間を2人も助けるなんて、仕事としては正反対だよね。」

「香織が会つたって言つ死神310341号つてヤツか。

うーん、310…3…4…あつ?

「どうしたの?」

腕を組みモグモグと頬を動かしつつ考えていた彼は、口内にあつたものを嚥下してから何かに気がついたように声を上げた。

そして、小首を傾げ問い合わせて来た彼女に対し、真剣な眼差しを向けて言つ。

「なあ。もしかして、その男の正体は本当は死神なんかじゃなくて……。」

しゃんしゃんと雪の隙間から優しい鈴の音が降つて来る。星の輝く夜空の中を軽やかに歩きながら、一寸前まで茶髪の男であつた恰幅の良い老人は朗らかな笑みを浮かべ歌つよつて雪葉を紡いだ。

Merry Christmas

心よつと愛し合ひの恋人たちへ

聖夜の奇跡を……

むじめい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5846z/>

---

お迎えは死の間際に

2011年12月19日17時58分発行